

# 親鸞の太子信仰——四天王寺・法隆寺の太子信仰との関係を中心に——

小 松 俊 一 郎

## はじめに

親鸞の太子信仰については、これまでその典拠とされた文献が四天王寺系の太子信仰に連なるものであることや、親鸞の聖徳太子関係の和讃に四天王寺系の要素が多くみられること等から、先行研究において、その太子信仰も四天王寺系の太子信仰に連なるものではないかとされてきた。本研究では親鸞（二一七三―一二六二）が四天王寺系の太子信仰だけでなく、法隆寺系等の太子信仰の影響を受けていた、あるいは親鸞の太子信仰が、四天王寺系・法隆寺系等に縛られるものではなかったことを、親鸞の著作と四天王寺系・法隆寺系の太子伝記を比較することで示したい。

親鸞の聖徳太子関連の著作について、典拠となったものとして主に『六角堂縁起』、『四天王寺御手印縁起』、『聖徳太子伝暦』、『聖徳太子御廟記文』、『三宝絵詞』、『日本三宝感通集』、『文松子伝』等が挙げられる。これらは四天王寺との関係が見られ、吉田一彦氏は早島有毅氏の『皇太子聖徳奉讃』（七五首）の分析をもとに、親鸞の

『皇太子聖徳奉讃』に見られる聖徳太子信仰は、「全体として四天王寺の聖徳太子信仰の系譜に連なるものと断定してよいと考えます。」と親鸞の『皇太子聖徳奉讃』に見られる聖徳太子信仰は四天王寺の聖徳太子信仰の系譜に連なるものであるとの見解を示している。また、廣田至氏が「親鸞の太子和讃に見られる聖徳太子信仰は、当時主流であった四天王寺系の太子信仰の影響を色濃く受けていることがわかる。」と述べているように、親鸞の太子信仰は四天王寺系の影響が強くあると指摘されている。確かに親鸞著作には四天王寺系の太子信仰の要素が見られる。しかし吉田氏の挙げる『皇太子聖徳奉讃』には、四天王寺系の太子信仰の内容の他にも、法隆寺系の伝記の要素も見られるため、親鸞の太子信仰が四天王寺の聖徳太子信仰の系譜に連なるものであるとの断定は難しいのではないかと。親鸞の太子信仰には四天王寺系の要素が見られることは確かではあるが、親鸞の太子信仰は一つの系統に縛られるものではなかったのではないかと考える。

本研究では、まず太子信仰について、主に太子慧思禪師後身説、

観音化身説、また、太子信仰の霊場である四天王寺・法隆寺について確認する。次に四天王寺・法隆寺が対立関係にあったと言えるのかを、両系統の伝記の内容、また『天王寺秘決』と『聖德太子伝私記』との関連から示す。最後に、親鸞の太子信仰について確認し、親鸞の太子関連著作と四天王寺系・法隆寺系の伝記の内容を比較することにより、四天王寺系や法隆寺系等の特定の系譜に縛られるものではなかったことを指摘する。

## 一 聖德太子信仰

本章では、平安・鎌倉期の太子信仰について、主に親鸞著作に見られる太子慧思禅師後身説、観音化身説等を概観する。その後に、聖德太子の霊場として代表的な存在である四天王寺・法隆寺について確認する。

### 一―一 太子慧思禅師後身説について

親鸞の聖德太子関連の著作には、太子慧思禅師後身説や太子観音化身説等の内容がみられる。太子慧思禅師後身説とは、聖德太子（五七二、五七三―六二一／五七四―六二二）を、中国天台宗第二祖である慧思禅師（五一五―五七七）の生まれ変わりとする説で、『唐大和上東征伝』や『上宮皇太子菩薩伝』等にその記述が見られる。

延暦初め頃に思託（生没年不詳）によって記されたとされる聖德太子の伝記である『上宮皇太子菩薩伝』において、「思禅師後生日

本国橘豊日天皇宮<sup>④</sup>と、慧思禅師が聖德太子として生まれたことが述べられている。また宝亀一〇年（七七九年）に淡海三船（七二二―七八五）によって記された、鑑真（六八七―七六三）の日本への渡来の顛末を記した書である『唐大和上東征伝』にて、「日本国昔有聖德太子曰、二百年後聖教興於日本。今鍾此運。願大和上。東遊興化。大和上答曰。昔聞南嶽思禅師遷化之後。託生倭国王子。興隆佛法。濟度衆生。又聞日本国長屋王崇敬佛法<sup>⑤</sup>」と鑑真が、聖德太子が慧思禅師の生まれ変わりと聞いたことがあると記述されている。

太子慧思禅師後身説は、天台宗祖である最澄（七六七―八二二）にも見られ、最澄の弟子である光定（七七九―八五八）が著した『伝述一心戒文』に、「今我法華聖德太子者、即是南嶽慧思大師後身也。厩戸託生、汲引四国。請持經於大唐、興妙法於日域。等鐸振天台、相承其法味。日本玄孫興福寺沙門最澄<sup>⑥</sup>」とあり、聖德太子は慧思禅師の後身であり、最澄はその玄孫であるとする記述がある。

聖德太子が慧思禅師の生まれ変わりであるとされる理由について、先行研究において、宮崎健司氏が

鑑真とのかかわりはもちろんであろうが、一つには当時の日本の仏教界の事情があったと思われる。仏教伝来が百済からであったことは、後々まで朝鮮仏教が日本仏教に影響を与える結果となった。入唐僧道慈は当時の日本仏教が中国仏教と大いに異なることを批判しており、仏法興隆の祖と位置づける太子を中国仏教の系譜につながる存在と強調する必要があったのではな

いだろうか。また仏教公伝年が中国の末法元年を意識したものであったことから、慧思が末法に論及した最初の人物であったことも大きいと思われる。<sup>⑦</sup>

と述べており、日本仏教の祖である聖德太子と中国仏教を結び付けることが大きな目的であったのではないかと指摘がある。

## 一―二 太子観音化身説について

太子観音化身説は、聖德太子を救世観音の化身であるとする説で、平安時代に成立したとされる聖德太子伝記である『聖德太子伝暦』にて、その記述が見られる。

『聖德太子伝暦』に聖德太子の出生について

卅二年辛卯春正月朔。甲子夜。妃夢有金色僧容儀太艷。对己而立。謂之曰。吾有救世之願。々暫宿后腹。妃問。為誰。僧曰。吾救世菩薩。家在西方。妃答。妾腹垢穢。何宿貴人。僧曰。吾不厭垢穢。唯望彰感人間。妃答。不敢辞讓。左右隨命。僧懷懼色。躍入口中。妃即驚悟。喉中猶似吞物。妃意太奇。語皇子。々々答云。除之所有必得聖人。自此以後。始知有娠。妃之妊也。性殊叡敏。動止閑爽。樞機弁悟。経于八月言聞于外。皇子并妃並以太奇。<sup>⑧</sup>

と、聖德太子の母が金色の姿をした救世観音が夢に出て、太子を懐妊したことが述べられており、太子が救世観音の化身であることが示されている。『聖德太子伝暦』のこの記述の他にも、平安時代初

期に成立したとされる太子伝記の『上宮聖德太子伝補闕記』に「石余池辺宮御宇天皇。庶妹間人穴太部皇女為后。后夢有金色僧。容儀太艷。对后而立。謂之曰。吾有救世願。々暫宿后腹。后夢中許諾。自此以後。始知有娠。」<sup>⑨</sup>とあり、『聖德太子伝暦』と似た内容がみられる。

『聖德太子伝暦』には、太子懷妊の説話の他にも、「日羅跪地而合掌白曰。敬礼救世観世音大菩薩。伝灯東方粟散王。」<sup>⑩</sup>と、百済の日羅（？～五七三）が聖德太子を救世観音大菩薩と礼拝したことが述べられている。また、

百済王使。王子阿佐等来。調貢。語領客曰。僕聞。此国有一聖人。僕自拝観。情願足癸。太子聞之。直引殿内。阿佐驚拜。熟見太子之顔。復見左右手掌。左右足掌。而再起再拜兩段。退而出庭。右膝著地。合掌恭敬曰。合掌敬礼。救世大慈。観音菩薩。妙教流通。東方日国。四十九歳。伝灯演説。大慈大悲。敬礼菩薩。<sup>⑪</sup>

とあり、百済の王子である阿佐太子（生没年不詳）が来朝し、聖德太子に救世大慈観音菩薩と合掌礼拝したことが記されている。

以上のように、『聖德太子伝暦』では、聖德太子と救世観音を結び付ける記述が多数見受けられる。また、観音信仰には、観音菩薩単体での信仰の他にも、阿弥陀仏の脇士としての観音菩薩の信仰もあるが、景戒（生没年不詳）によって著わされ、弘仁一三年（八二二年）頃成立したとされる仏教説話集『日本霊異記』、また、平安

後期の説話集である『今昔物語集』の観音菩薩に関する説話数を見てみると、『日本霊異記』では聖観音が一四話、如意輪観音については無し、十一面観音が三話、千手観音が二話、脇士・その他が一話、『今昔物語集』では聖観音が四三話、如意輪観音が六話、十一面観音が一四話、千手観音が一三話、脇士・その他が五話と、脇士としての観音説話は少ないことが分かる。そのため、石橋義秀氏が人々は観音を慈悲深い霊験あらたかな菩薩と信じ、大抵はその観音に金銀財宝や病の回復、あるいは急難を免れんことなど、現世の利益を願い求めている。それに対して、観音はどんな無理な願いごとでも聞き入れ、人々を救助されるのである。観音は真に有難い菩薩とされているのである<sup>13</sup>。

と述べているように、一般的に信仰されていた観音菩薩は、脇士としてではなく、単独の観音菩薩としての信仰が多かったと考える。太子観音化身説でも、救世観音単体としての信仰が多く、脇士としての化身での信仰は少なかったのではないか。また、『日本霊異記』の内容から、石橋義秀氏は『霊異記』においては、観音に対して現世利益を願う信仰が多く見られ、しかも具現化された観音像に対する信仰が多く見られると言えよう<sup>14</sup>。と述べているように、奈良時代末期から平安時代初期にかけての観音信仰は現世利益的信仰であったと考えられる。『日本霊異記』について駒木敏氏は、

他の仏菩薩に対する信仰の説話（霊験譚）との違いを考慮に入れないながら、観音信仰説話からとり出しうる特質を結論的に示す

ならば、まず現世利益的信仰があげられる。これは他の霊験譚一般についても言いうることであり、また霊異記が「善悪現報」譚を編むことを目的としていたと言えればそれまでのことであるが、説話の主人公たちが観音に惹き念じ期待したものは、富財宝と飲食とを筆頭として、怨病の治癒や危難からの救出であり好き女でさえあったというように、総じて現世を安穩に生き過ぐべき事柄であった。そして次には、それらの願望の実現（善報）を感じの霊異という形で語るのが観音信仰説話の本質であり、また感応の方法も、あらゆる人の形に化身して現世に現われる（観音の化応は僧ないし沙弥に限らない）のである<sup>15</sup>。

と述べており、現世利益的な信仰が主なものであり、来世信仰的な面はあまり出てきていなかったと考えられる。

### 一―三 四天王寺・法隆寺について

聖徳太子信仰の代表的な霊場として四天王寺と法隆寺が挙げられる。四天王寺は聖徳太子によって建立されたとされる寺院で、『日本書紀』にも聖徳太子建立の記述があり、太子信仰の中心寺院であった。また、藤原忠平（八八〇―九四九）の日記である『貞信公記』には「廿二日、泰舜・泰幽太元、明達四王、向美濃、静因六足天王寺、定玄不動相応寺、各二七日、海賊時祈諸神位記可成之事、仰左丞<sup>16</sup>」と、平将門の調伏のために大威徳法を修したことが述べられており、四天王寺は、国家的寺院としての性格を持っていたと考えら

れる。林幹弥氏は四天王寺の位置から

国家的寺院としての性格をもつ四天王寺は、いま一つの機能をもっていた。それはこの寺のもつ地理的位置から導かれるものである。それは、第一に、四天王寺がある摂津の難波というところが、京都から片道一泊、ゆっくり行っても、二泊のみのりにあったことである。また、天王寺のすぐ近くには住吉社があり、この二つをあわせて、京都のひとびとの、格好の物語で場所となっていたものと思われる<sup>17)</sup>。

と、京都の人々にとっては人気の参詣寺院であつたのではないかと述べている。

四天王寺は太子信仰の霊場として、また、浄土信仰の聖地としても重要な場所であつたと示すものとして『四天王寺御手印縁起』が挙げられる。この『四天王寺御手印縁起』は、聖徳太子の作とされるもので、四天王寺の金堂において寛弘四年（一〇〇七年）に発見される<sup>18)</sup>。この『四天王寺御手印縁起』には、「宝塔金堂。相当極楽土東門中心<sup>19)</sup>」と、四天王寺の宝塔と金堂が、極楽浄土の東門の中心に当たることが述べられており、『今昔物語集』に、

其寺ノ西門ニ、太子自ラ釈迦如来転法輪所当極楽土東門中心ト書給ヘリ。是ニ依テ、諸人彼ノ西門ニシテ弥陀ノ念仏ヲ唱フ。于今不絶シテ、不参ヌ人無シ。是ヲ思フニ、此ノ天王寺ハ、必ず、人参ル可キ寺也。聖徳太子の正ク仏法ヲ伝ヘムガ為ニ、此ノ国ニ生レ給テ、専ラ願ヲ発テ造リ給ヘル寺也。<sup>20)</sup>

と、四天王寺の西門に、聖徳太子が、釈迦如来転法輪所当極楽土東門中心と書いたので、人々は西門において念仏を唱えるようになった。四天王寺は、必ず参詣しなくてはならない寺で、太子が仏法を伝え、願を立てて建立した寺であると述べられている。藤谷厚生氏が

四天王寺の宝塔・金堂の伽藍は「極楽土の東門の中心に相い当れり」という思想がこれより広がることとなる。四天王寺が、浄土信仰の聖地と位置づけられ、多くの念仏聖がここに集まり天王寺別所を形成し、やがて鎌倉時代には西門の石鳥居が建てられ、その扁額に「釈迦如来 転法輪処 当極楽土 東門中心」と刻される。この偈文の内容は『今昔物語』や『梁塵秘抄』などにも記され、今様にも詠われて人口に膾炙されるなど、四天王寺は浄土信仰の一大拠点となった。<sup>21)</sup>

と述べているように、四天王寺は、太子信仰とともに、浄土信仰の聖地としても一大拠点となっていたと考えられる。

次に法隆寺については、四天王寺と同様に、聖徳太子によって建立されたとされる寺院である。奈良時代には寺運が盛り上がった法隆寺であるが、平安時代以降は衰退していた。しかし、鎌倉時代に入ると、太子信仰の霊場としての地位を築いていた四天王寺に対抗し、顕真（一一三一―一二九二）によって、法隆寺の地位向上が図られることとなったと考えられている。<sup>22)</sup>

『上宮聖徳太子伝補闕記』・『聖徳太子伝暦』には、調子磨という

聖徳太子の舎人が登場する。この調子麿は『上宮聖徳太子伝補闕記』において登場する。『上宮聖徳太子伝補闕記』には、「麻呂年八十四。己巳年死。子足人。古年。十四年壬午八月廿九日。出家大官大寺。麻呂者。聖徳太子十三年丙午。年十八年始為舎人。癸亥年二月十五日。始出家為僧。」と調子麿が一八歳で初めて聖徳太子の舎人となり、癸亥の年に出家し、八四歳で亡くなったことが述べられている。『上宮聖徳太子伝補闕記』・『聖徳太子伝暦』ともに調子麿と法隆寺を関係付けるような記述は見られないが、顕真の著わした『聖徳太子伝私記』において、調子麿と法隆寺の関係が強調されるようになる。『聖徳太子伝私記』については、法隆寺の顕真の著作で、成立は、上巻は暦仁元年（一二三八年）、下巻は延応元年（一二三九年）～寛元元年（一二四三年）頃とされている。法隆寺と聖徳太子に関する事柄を記したもので、その事柄は代々相伝された秘事口伝のもので、顕真が師匠の隆詮から唯一継承した人物であることが述べられている。『聖徳太子伝私記』において調子麿は、「太子御母、鬼前大后者、辛巳歳十二月廿二日薨給、廿八日奉葬婆之陵、明年正月十五日夜半、調子丸與太子、改葬石河磯長廟給云々、或直自鵜中宮寺、奉葬磯長墓所。」<sup>24</sup>と、太子の母の遺体を、太子と調子麿によって、磯長の廟所に改葬したこと、また、

御廟前有楠、此太子葬送之時杵也。或母皇女葬送之杵也、二義伝来無取捨、云々母之時吉。自宮出時入御廟時太子。大兄王調子麿也、此杵在之。（中略）用明天皇、自御殿至于門前、太子

與馬子、奉持出給、次調子與跡見奉持。母間人皇女自中宮御殿、至于飽波、太子與久米皇子奉持給、次調子與河勝奉持云。太子大兄大与馬子、自宮出十余丁奉持給、路間臣連面々奉持給、奉入御廟之時、馬子調子也。<sup>25</sup>

と、太子とその父母の遺体を調子麿が奉持したことが述べられており、調子麿が太子と近い人物であったことが強調されていることが分かる。また、『聖徳太子伝私記』には「聖武天皇宣旨状」が記載されている。その内容は

聖武天皇宣旨状

太政官 法隆寺問寺

右正三位藤原朝臣宣奉 勅、伝聞、調子丸者、百済国聖明王輔臣宰相一男也、而為。厩戸皇子奉功。進渡馬台者也、然則聖王常隨之侍者、動止見聞之僕從也、仍以彼子々孫々之伴類、為当代々世々之奴婢、更不可違失者、寺宣承知、依宣行之。<sup>26</sup>

と、調子麿が、百済の聖明王の宰相の子であり、聖徳太子の侍者で、その子孫は法隆寺の奴婢であることを聖武天皇の名のもとに述べられている。そして、「法隆寺康仁寺主者、当寺奴也僕也、自調子丸至康仁大徳廿一代也、其繼図者、康仁之時朽損跡形無之、仍其一男慶好寺主、始作栗脉云々、其後不絶書伝至于顕真五師八代也。」<sup>27</sup>と、法隆寺の康仁が調子麿の二一代目の子孫であり、調子麿から康仁までの系図は失われてしまったため、慶好から新たな系図を作り、顕真まで書き継いで八代になっていることが述べられている。<sup>28</sup>

『聖德太子伝私記』の記述を見ると、顕真が調子磨を太子にとって非常に近い人物で、聖明王の宰相の子であり、その人物の子孫が自らであると主張することで、法隆寺の權威を高めようとしていたことが伺える。

以上、親鸞著作に見られる太子慧思禪師後身説、観音化身説等を概観し、聖德太子の霊場として四天王寺・法隆寺について確認した。四天王寺・法隆寺は太子信仰の代表的な霊場として挙げられ、共に聖德太子創建の寺院であり、四天王寺は、太子信仰とともに、浄土信仰の聖地としても一大拠点となっていたこと、法隆寺は顕真が權威向上を図っていたことが確認できた。この四天王寺・法隆寺については、先行研究において、対抗関係にあったのではないかとする指摘がある。そのため、次章では、この両寺の対抗意識について、両寺の史料から確認したい。

## 二 四天王寺・法隆寺の対抗意識

本章では、四天王寺・法隆寺が、先行研究で指摘されているような対抗意識があったと言えるのかを確認したい。

四天王寺・法隆寺の対抗意識について、吉田氏は

聖德太子信仰は、四天王寺と法隆寺の二寺を機軸に進展したが、両者はライバル関係にあり、その基調には協調関係というより、むしろ対抗関係が存在した。そのため、しばしば、相手側の言い分を否定したり、吸収しようとする言説が唱えられ、

それに適合するような法物が作成され、伝記が著作されていた。私は、聖德太子信仰の発展は、この二寺による対抗的な教宣活動がその原動力になったと考えている。<sup>29)</sup>

と、四天王寺と法隆寺の二寺は対抗関係にあった。聖德太子信仰の発展は、この四天王寺と法隆寺の対抗関係によるものであったのではないかと述べている。また、榊原史子氏は

四天王寺と法隆寺は、互いの寺院の動向に関心を持ち、多くの情報を得ていたのであり、それぞれが聖德太子信仰の中心的な寺院となるべく、他方の寺院よりも優位な地位に立とうという対抗意識を持ち続け、それを行動に移していったのである。<sup>30)</sup>

と、四天王寺と法隆寺が対抗意識を持って、聖德太子信仰の中心的な寺院となるべく、互いに優位に立とうとしていたと述べており、先行研究においては四天王寺と法隆寺が対抗意識を持つ関係にあったことが指摘されている。

四天王寺系・法隆寺系の伝記を比較すること、また、四天王寺の『天王寺秘決』と、法隆寺の『聖德太子伝私記』の内容から、両寺院がどのような関係にあったのかを確認する。

二― 四天王寺・法隆寺の伝記について

聖德太子について最初に記されたとされる書物として『日本書紀』が挙げられる。その中に四天王寺と法隆寺に関する記述がある。『日本書紀』での四天王寺・法隆寺の記述を確認すると、四天王寺

が聖德太子創建の寺院であると述べられているが、法隆寺については、創建が聖德太子であると明記する描写は見受けられない。まず、四天王寺についての記述を確認する。四天王寺については四箇所の記述がある。

『日本書紀』

乃斷取白膠木、疾作四天王像、置於頂髮而發誓言、白膠木、此云農利渥。今若使我勝敵、必當奉為護世四王、起立寺塔。(中略)平乱之後、於摂津国造四天王寺。<sup>31)</sup>

↓聖德太子は物部守屋との戦いに勝利すれば、寺塔を建立すると誓われた。守屋を倒し、摂津国に四天王寺を造ったことが述べられる。

是歳、始造四天王寺難波荒陵。<sup>32)</sup>

↓推古元年(五九三年)に四天王寺が建立されたことが述べられる。

三十一年秋七月、新羅遣大使奈末智洗爾、任那遣達率奈末智、並来朝。仍貢仏像一具及金塔并舍利、且大観頂幡一具・小幡十二条。即仏像居於葛野秦寺。以余舍利・金塔・観頂幡等、皆納于四天王寺。<sup>33)</sup>

↓推古三十一年(六三三年)に、新羅、任那の使節が来朝して、仏像、金塔、観頂幡、舍利を献上し、金塔、観頂幡、舍利が四天王寺に納入されたことが述べられる。

二月壬子朔、於三韓遣学問僧。己未、阿倍大臣請四衆於四天王寺、迎仏像四軀、使坐于塔内。造靈鷲山像、累積鼓為之。<sup>34)</sup>

↓大化四年(六四八年)に、安倍大臣が四天王寺に仏像四体を塔の中

に安置し、靈鷲山の像を作ったと記される。

以上『日本書紀』の四天王寺に関する記述を見ると、四天王寺は聖德太子によって建立されたことが明記されていることが分かる。

次に、『日本書紀』の法隆寺に関する記述については四箇所確認できる。

『日本書紀』

是歳、皇太子亦講法華經於岡本宮。天皇大喜之、播磨国水田百町施于皇太子。因以納于斑鳩寺。<sup>35)</sup>

↓推古一四年(六〇六年)に、太子が『法華經』を講義すると、天皇が大いに喜び、播磨国の水田百町を与えられ、太子はそれを斑鳩寺に寄進したことが述べられている。

於是山背大臣兄王等、自山還入斑鳩寺。<sup>36)</sup>

↓皇極二年(六四三年)に、山背大兄王子が蘇我蝦夷に攻められた後に、斑鳩寺に入ったことが述べられている。

是冬、修高安城、収畿内之田税。于時、災斑鳩寺。<sup>37)</sup>

↓天智八年(六六九年)に、斑鳩寺が火災にあったことが述べられる。

夏四月癸卯朔壬申、夜半之後、災法隆寺。一屋無余。大雨雷震。<sup>38)</sup>

↓法隆寺が火災によって全焼したことが述べられている。

以上『日本書紀』の法隆寺に関する記述を見ると、創建、造立に関する記述がなく、誰が建立したかについては明記されていないことが分かる。法隆寺の創建、造立に関する記述が無いことは、法隆

寺側にとつては、地位向上を図り、他の有力寺院に対する対抗意識を抱かせる要因であったと考えられるであろう。

次に聖德太子の生没年について、四天王寺と法隆寺で異なっている部分がある。『日本書紀』には太子の生年は記述されていないが、守屋討伐時に「是時厩戸皇子束髮於額、古俗、年少児、年十五六間束髮於額<sup>39</sup>」と述べられており、一五か一六歳であったことが述べられている。逆算してみると、太子の生年は敏達元年（五七二年）、もしくは、敏達二年（五七三年）であったことが分かる。没年については「二十九年春二月己丑朔癸巳、半夜厩戸豐聰耳皇子命葬于斑鳩宮。」<sup>40</sup>と述べられており、推古二十九年（六二一年）に亡くなっていることが示されている。『聖德太子伝暦』でも同様の説が取られている。

一方、法隆寺側は異なる説を取っており、『上宮聖德法王帝説』には「甲午年産。壬午年二月廿二日薨逝也。生四十九年。」<sup>41</sup>と、太子が敏達三年（五七四年）に誕生し、推古三〇年（六二二年）二月二二日に亡くなったという説を取っている。また、守屋討伐時の年齢についても「聖王生十四年也。」<sup>42</sup>と、一四歳であったとされており、『日本書紀』・『聖德太子伝暦』と異なる説を取っている。

『聖德太子伝暦』には

廿九年辛巳春二月。太子在斑鳩宮。命妃沐浴。太子亦沐浴。服新潔衣袴。語妃曰。吾今夕遷化矣。子可共去。妃亦服新潔衣裳。臥太子副床。明旦太子并妃久而不起。左右開殿戸。乃知遷化。

親鸞の太子信仰

時年四十九或又説壬午年者誤也。<sup>43</sup>

と述べられており、『日本書紀』と同じ説を取っている。さらに、壬午年の説は誤りであると法隆寺説を否定している。

次に、太子慧思禪師後身説の慧慈の没年について、『日本書紀』には「我雖異国、心在断金、其独生之、有何益矣。我以来年二月五日必死。因以遇上宮太子於浄土、以共化衆生。於是慧慈当于期日而死之。」<sup>44</sup>とあり、推古三〇年（六二二年）二月五日に亡くなっていることが述べられている。

『上宮聖德法王帝説』には「吾慧慈来年二月廿二日死者。必逢聖王而奉浄土。遂如其言。到明年二月廿二日。発病命終也。」<sup>45</sup>と、推古三一年（六二三年）二月二二日に病になって亡くなったという説を取っている。

『聖德太子伝暦』には「吾以来年二月五日或説曰。二月廿二日必死。必死竟。如其言。明年二月廿二日。無病而逝。」<sup>46</sup>と、推古三〇年（六二二年）二月二二日に病にならずに亡くなったと述べられている。『日本書紀』と異なつた没年であることについて吉田氏は

慧慈についても「無病」にて死去したと述べて、「病を發して」死去したとする法隆寺説を否定し、慧慈の死去年月日は推古三十年二月二十二日のことだとしている。ここで、あえて二月五日ではなく二月二十二日としたのは、法隆寺が主張する太子の死去年月日は慧慈の死去年月日と混同、誤認したものだと言指摘する意図で主張されたものと理解される。<sup>47</sup>

と、法隆寺説は、太子の死去年月日と慧慈の死去年月日とを混同、誤認したものと指摘する意図で主張されたものであるという見解がなされている。

次に、聖徳太子の異名の表記について確認する。聖徳太子は様々な異名で呼ばれており、「厩戸皇子」や「豊聡耳」等が挙げられる。この「豊聡耳」については、太子が一度に一〇人の訴えを聞くことができたという伝説が由来のものである。この「豊聡耳」についても四天王寺系、法隆寺系で異なる点があり、『日本書紀』では「及壯、一聞十人訴、以勿失能弁、兼知未然。」<sup>48</sup>、故称其名、謂上宮厩戸豊聡耳太子。」<sup>49</sup>と、聖徳太子が一度に一〇人の訴えを聞くことができ、間違ふことなく聞き分けたことに由来して「上宮厩戸豊聡耳太子」と呼ばれたことが記されている。一方、『上宮聖徳法王帝説』では「至長大之時。一時間八人之白言而辨其理。又聞一知八。故号曰厩戸豊聡八耳命。」<sup>50</sup>と述べられており、聖徳太子が一〇人ではなく、八人の訴えを聞き分け、「豊聡八耳」と呼ばれていたという説が採用されている。『聖徳太子伝暦』では「豊聡八耳」という言葉は出てくるが、「大臣率群臣已下。敢献御名。称厩戸豊聡八耳皇子。又称大法王皇太子。々々辞讓。」<sup>51</sup>と述べられており、大臣が群臣を率いて、聖徳太子に「厩戸豊聡八耳皇子」と「大法王皇太子」の名前を与えたが、太子は辞讓されたことが記されている。

以上それぞれの太子伝の違いを見ると、『上宮聖徳法王帝説』が『日本書紀』、『聖徳太子伝暦』と異なった説を取っていること、『聖

徳太子伝暦』が慧慈の病没を否定していること、壬午年の説は誤りであると明記している等、四天王寺と法隆寺が互いに意識し合っていたと考えられる点が見受けられる。

## 二―二 『天王寺秘訣』・『聖徳太子伝私記』について

次に、親鸞当時の史料と考えられる『天王寺秘訣』と『聖徳太子伝私記』の内容から、四天王寺・法隆寺の関係を探る。

四天王寺系の史料である『天王寺秘訣』（『提婆羅惹寺摩訶所生秘訣』は嘉祿三年（一二二七年）に撰述されたものであり、聖徳太子と四天王寺に関する事柄をまとめたものである。『天王寺秘訣』の内容からは、四天王寺と法隆寺を対比させる記述が多くみられる。

『天王寺秘訣』の内容を確認すると、

万塔院。聖武天皇御願。六時堂。同前。本食堂。三昧堂。学恵律師十師。天元六年。冷泉院御願。新院。葉師院。清隱十禪師。元慶六年。朱雀院御願。念仏堂。為西門南脇移垣外後白河院御時也。鳥羽院御願。百濟寺。範鏡寺。範海寺。百濟寺。王住百濟群地。福田院。菩提院。正国可尋之。冥興寺、安部寺之歟。<sup>52</sup>

と、四天王寺の別院が聖武天皇、冷泉院、朱雀院、鳥羽院の御願によって、建立されたことが述べられている。この箇所について榊原氏は、

『天王寺秘訣』の撰述者が、第一の項目において四天王寺の別院についてまとめたのは、法隆寺の別院と法隆寺の別院を比較

する意識があったからではないかと推定される。四天王寺の別院の発願者として、天皇と上皇の名前をあげているのは、四天王寺の別院に権威付けをしたかったためであろう。そこには、明らかに法隆寺の別院（東院伽藍）に対抗する意識が存在している。<sup>53</sup>

と述べており、『天王寺秘決』の四天王寺の別院についての内容から、法隆寺の別院との比較を行う意識があったのではないかということ、天皇と上皇の名前をあげているのは、四天王寺の別院に権威付けをしたかったためであることが指摘されている。また、顕真は、『聖徳太子伝私記』の中で、「聖武天皇宣旨状」を用いて、調子麿と法隆寺の関係性に説得力を持たせようとしており、『聖徳太子伝私記』の「聖武天皇宣旨状」は、『天王寺秘決』での、天皇や上皇の強調に対抗するものであったとも考えられるのではないだろうか。また、『聖徳太子伝私記』において、

法隆寺、太子建立之中、最初御願也、立願、即明明天皇治三年丙午歲也、（中略）然則四十六个寺院中、法隆寺最先也、天王寺者、守屋合戦之御願也、即丁未歲合戦之纔立玉造岸、又御生年廿三歲、被移荒陵池上、今年法隆寺同時建立云々、<sup>54</sup>

と、法隆寺が太子の最初の願いによって建立され、四天王寺は守屋合戦時の願いであると比較するような内容がみられるため、『聖徳太子伝私記』には、四天王寺への対抗という面があると考えられるのではないか。

また、榊原氏は『聖徳太子伝私記』と『天王寺秘決』が文末に「文」と記して参照した史料の文章を紹介し、それが四天王寺系の史料では『天王寺秘決』にのみ見えるもので、法隆寺系の史料では『聖徳太子伝私記』が初出であることを指摘し、『聖徳太子伝私記』が『天王寺秘決』を読んで記された書であると考えられることを指摘している。<sup>55</sup>

以上、四天王寺系と法隆寺系の太子伝記の内容の違いを見た後、先行研究において指摘される両寺の対抗意識について確認した。まず四天王寺系の書物である『日本書紀』『聖徳太子伝暦』と法隆寺系の書物である『上宮聖徳法王帝説』との比較を行った。その結果、聖徳太子の生没年や異名について等の内容に違いがあることが確認できた。次に親鸞当時に成立した書物と考えられる『天王寺秘決』（『提婆羅惹寺摩訶所生秘決』）と、『聖徳太子伝私記』から、両寺の関係を探った。以上の結果として、『聖徳太子伝暦』において、『上宮聖徳法王帝説』の説が否定されている箇所がある、『聖徳太子伝私記』に法隆寺と四天王寺を比べる文が見受けられる等、両寺院共に、互いへの対抗という面があると考えられることを示した。

### 三 親鸞の太子信仰と四天王寺・法隆寺の太子信仰

ここまで四天王寺・法隆寺の太子信仰、両寺の対抗関係について見てきたが、それらは親鸞の太子信仰の上にどのように表れている

のであろうか。親鸞の太子信仰について、先行研究において、吉田氏は、親鸞の『皇太子聖徳奉讃』に見られる聖徳太子信仰は、「全体として四天王寺の聖徳太子信仰の系譜に連なるものと断定してよいと考えます。」<sup>56</sup>と述べており、また、廣田氏が「親鸞の太子和讃に見られる聖徳太子信仰は、当時主流であった四天王寺系の太子信仰の影響を色濃く受けていることがわかる。」<sup>57</sup>と述べているように、親鸞の太子信仰は四天王寺系の影響が強くあることが指摘されている。しかし、親鸞の太子著作の内容を見ると、確かに、四天王寺系の太子伝記の要素が見られるが、四天王寺系以外の太子伝記の要素も確認できる。このことを、親鸞の太子著作と四天王寺系・法隆寺系の伝記とを比較することによって示す。まず、親鸞の太子信仰がどのようなものであったのか、親鸞著作の内容から確認する。その後、親鸞著作と四天王寺系・法隆寺系の伝記との比較を行う。

### 三― 親鸞の太子信仰について

親鸞にとって聖徳太子がどのような存在であったのか、『正像末和讃』『皇太子聖徳奉讃』の八三首目には

仏智不思議の誓願を 聖徳皇のめぐみにて

正定聚に帰入して 補処の弥勒のごとくなり<sup>58</sup>

### 九〇首目

和国の教主聖徳王 広大恩徳謝しがたし

一心に帰命してたてまつり 奉讃不退ならしめよ<sup>59</sup>

### 九一首目

上宮皇子方便し 和国の有情をあはれみて

如來の悲願を弘宣せり 慶喜奉讃せしむべし<sup>60</sup>

とあり、これらの和讃から、親鸞は、聖徳太子を和国の教主と称しており、太子が釈尊と同じはたらきをしていたと考えていたことが分かる。梅林久高氏が

聖徳太子を讃仰する和讃、明恵、叡尊なども作っている。もとより、専修念仏の弾圧に攻撃点を与えた解脱房貞慶作といわれる九首和讃もある。いづれも聖徳太子が救世観音の化身として讃えられている。だが、親鸞にとっては単なる讃仰ではなく、

自からの信仰の形成に大きな影響を与えた、和国の教主、末法の教主としての弥陀の本願を弘宣され現われたと内面的にとらえている。(中略) 聖人は、念仏を弘められた教主としてあおがれてみえるのである。それは、末法思想の捉え方と機の徹底した罪悪深重の凡夫という自己内省にもとづく。弥陀の悲願は末法化導とし観音・勢至とが聖徳太子・源空とあらわれて親鸞を選択本願の源海に帰入せしめられたのである。従って、釈尊は末法にまさに和国の教主聖徳太子と示現されたのであり、同体である。<sup>61</sup>

と述べているように、和国の教主と称している通り、聖徳太子は日本における釈尊のような役割を担った存在だとみなしていたと考えられる。

また、親鸞の聖徳太子への信仰を物語る出来事として六角堂（頂法寺）の夢告が挙げられ、『恵信尼消息』に

やまをいて、六かくだうに百日こもらせ給て、ごせをいのらせ給けるに、九十五日のあか月、しやうとくたいしのもんをむすびて、じげんにあづからせ給て候ければ、やがてそのあか月いでさせ給て、ごせのたすからんするえんに、あいまいらせんと、たづねまいらせて、ほうねん上人に、あいまいらせて、又六かくだうに百日こもらせ給て候けるやうに、又百か日、ふるにもてるにも、いかなるたいふにも、まいりてありしに<sup>62</sup>

とあるように親鸞にとつて六角堂参籠は、親鸞を法然のもとへと向かわせるきっかけとなる重要な出来事となった。親鸞の行った参籠について龍口恭子氏は

「参籠」とは、「一定期間、神仏の前に籠もり、念仏等の行を伴い、夢告を得ようとする風習」とする従来の定義に加えて、「聖地」において、精神と肉体との調和をはかりながら、「師の僧」のもとでなされる行であり、この行には、自己の意志を明らかにする「祈請の文」が必要であり、多くの場合、それに対応した「夢告」、或いは「願成就の文」、或いは「しるし」が示される一連の宗教的行為であると定義できよう。<sup>63</sup>

と、参籠とは、夢告やしるしを期待して行ったものであることを述べている。参籠を行う聖地として、聖徳太子創建であり、太子、観音の霊場であった六角堂が選ばれたという事は、親鸞は聖徳太子・

観音菩薩から夢告等を受けようとしたと考えられる。

法然の元へ向かわせ、日本における釈尊であるかのような表現をしていることから、聖徳太子が親鸞にとつて非常に大きい存在であることが伺える。さらに、法然を勢至菩薩の化身とし、聖徳太子もまた観音菩薩の化身としていたことから、親鸞にとつて聖徳太子は法然と並び立つような存在であったと考えられるであろう。

また、『皇太子聖徳奉讃』には、一一首目

聖徳太子印度にては 勝鬘夫人とむまれしむ

中夏晨旦にあらはれて 恵思禪師とまふしけり<sup>64</sup>

一二首目

晨旦華漢におはしては 有情を利益せむとして

男女の身とむまれしめ 五百生をぞへたまひし<sup>65</sup>

一三首目

仏法興隆のためとて 衡州衡山にましまして

数十の身をへたまひて 如来の遺教弘興しき<sup>66</sup>

一四首目

有情を済度せむために 恵思禪師とおはします

衡山般若台にては 南岳大師とまふしけり<sup>67</sup>

と述べられており、親鸞が太子恵思禪師後身説を採用していたことがわかる。また、一一首目において、聖徳太子がインドでは勝鬘夫人として生まれていたことが示されており、太子勝鬘夫人後身説も採用していることが分かる。

次に『正像末和讃』『皇太子聖德奉讃』、『皇太子聖德奉讃』、『大日本国粟散王聖德太子奉讃』を見ると、八四首目

救世観音大菩薩 聖德皇と示現して

多々のごとくすてずして 阿摩のごとくにそひたまふ<sup>66)</sup>

『皇太子聖德奉讃』、四一首目

阿佐太子を勅使にて わが朝にわたしたまひし

金銅の救世観世音 敬田院に安置せり<sup>69)</sup>

『大日本国粟散王聖德太子奉讃』、五二首

そのとき百済のつかひにて 阿佐王子きたれりき

太子をおがみてまふさしむ 敬礼救世大慈観音菩薩<sup>70)</sup>

とあるように、親鸞は太子観音化身説を採用していることが分かる。

さらに『皇太子聖德奉讃』の四二首目

この像つねに帰命せよ 聖德太子の御身なり

この像ことに恭敬せよ 弥陀如来の化身なり<sup>71)</sup>

この和讃から、親鸞は、聖德太子は救世観音の化身であり、阿弥陀仏の化身でもあると考えていたことが分かる。第一章において示した、現世利益を願うような救世観音ではなく、親鸞の太子観としては、聖德太子は、阿弥陀仏の化身としての救世観音の化身とみるべきであると考ええる。

三十二 四天王寺・法隆寺の太子信仰との関連について

親鸞の聖德太子著作では、典拠として『六角堂縁起』、『四天王寺

御手印縁起』、『聖德太子伝暦』等が挙げられるように、四天王寺系の太子伝記の説を取っていることが多い。しかし、一方で、四天王寺系の太子信仰以外の要素も、親鸞の著作の上において、確かに見受けられる。このことを、親鸞の聖德太子著作と『日本書紀』、四天王寺系の『聖德太子伝暦』、また、法隆寺系の『上宮聖德法王帝説』の内容との比較によって示す。

まず太子生没年について確認する。それぞれの生没年を列挙する。

・『日本書紀』

是時厩戸皇子束髪於額、古俗、年少児、年十五六間、束髪於額<sup>72)</sup>

↓守屋討伐時に、一五か一六歳であり、逆算すると、生年は敏達元年(五七二年)、もしくは、敏達二年(五七三年)となる。

二十九年春二月己丑朔癸巳、半夜厩戸豊聡耳皇子命葬于斑鳩宮。<sup>73)</sup>

↓推古二九年(六二一年)。生没年は『日本書紀』と『聖德太子伝暦』は同様の説である。

・法隆寺系『上宮聖德法王帝説』

甲午年産。壬午年二月廿二日薨逝也。生四十九年。<sup>74)</sup>

↓敏達三年(五七四年)に誕生し、推古三〇年(六二二年)二月二

二日に没している。

次に、親鸞の太子生没年を確認すると、

・『高僧和讃』

聖德太子 敏達天皇元年 正月一日誕生<sup>75)</sup>

↓生年は敏達元年(五七二年)。

以上、太子生没年を確認すると、親鸞は、聖徳太子の生年を敏達元年（五七二年）説を取っており、生没年に関しては四天王寺系の説を採用していることが分かる。

次に、太子の異名について確認する。「豊聡耳」「豊聡八耳」について

・『日本書紀』

及壮、一聞十人訴、以勿失能弁、兼知未然。<sup>76</sup>

故称其名、謂上宮厩戸豊聡耳太子。<sup>77</sup>

↓聖徳太子が一度に一〇人の訴えを聞くことができ、間違うことなく聞き分けたことに由来して「上宮厩戸豊聡耳太子」と呼ばれた。

・四天王寺系『聖徳太子伝暦』

大臣率群臣已下。敢献御名。称厩戸豊聡八耳皇子。又称大法王皇太子。々々辞讓。<sup>78</sup>

↓聖徳太子は「厩戸豊聡八耳皇子」と「大法王皇太子」の名前を辞讓した。

・法隆寺系『上宮聖徳法王帝説』

至長大之時。一時間八人之白言而辨其理。又聞一知八。故号曰厩戸豊聡八耳命。<sup>79</sup>

↓聖徳太子が一〇人ではなく、八人の訴えを聞き分け、「豊聡八耳」と号された。

次に親鸞の著作から確認する。

・『大日本国粟散王聖徳太子奉讃』

一一〇首目

太子の御名はあまたいます 厩戸・豊聡耳の皇子なり  
御誕生のところゆへ 厩戸ともにあらわせり<sup>80</sup>

↓「豊聡耳」を用いている。

・『皇太子聖徳奉讃』

七二首目

聖徳太子の御名おば 八耳皇子とまふさしむ

厩屋門の皇子とまふしけり 上宮太子とまふしけり<sup>81</sup>

↓「八耳皇子」と法隆寺系の「豊聡八耳」を用いている。

以上、まとめると太子の異名である「豊聡耳」「豊聡八耳」について、親鸞は、「豊聡耳」・「豊聡八耳」の両方の説を採用しており、異名に関しては、四天王寺系・法隆寺系の両方の系統の説を使用していたことが分かる。

また、親鸞は『皇太子聖徳奉讃』の中で一一首目に

聖徳太子印度にては 勝鬘夫人とむまれしむ

中夏晨旦にあらはれて 慧思禪師とまふしけり<sup>82</sup>

と述べられており、太子勝鬘夫人後身説を取っている。四天王寺系の『四天王寺御手印縁起』に「皇太子仏子勝鬘<sup>83</sup>」、法隆寺の顕真の『聖徳太子伝私記』に、「太子者、勝鬘夫人也、太子自宜仏子勝鬘云々<sup>84</sup>」と太子が勝鬘夫人であることが述べられており、勝鬘夫人後身説については、両系統共通のものであったと考えられる。

以上、親鸞の太子関係著作と四天王寺系・法隆寺系の太子伝記と

の比較を行った。結果として、生没年に関しては四天王寺系、太子の異名は四天王寺系・法隆寺系の両方、勝鬘夫人後身説等の両系統共通ものを使用していた。この結果から、親鸞の著作には、四天王寺系以外の太子伝記の要素を採用されていることが確認できた。先行研究の指摘のように、親鸞の著作において、生没年、太子の異名等において、四天王寺系の説が採用されていることから、親鸞が四天王寺系の太子信仰の影響を受けていたことは確かである。しかし、法隆寺系での太子の異名や両系統共通のものを採用している等、親鸞が四天王寺系の説のみならず、法隆寺系の説も採用していることが確認できた。親鸞が四天王寺系の太子信仰に連なるものであったならば、あえて法隆寺系の説を採用する必要はないのではないか。このことから、親鸞の太子信仰は一つの系統に縛られるものではなく、かつたのではないかと考える。

以上、本章では、親鸞の太子信仰について、まず、太子関連の親鸞著作や六角堂参籠等から、親鸞の太子信仰がどのようなものであったのかを確認した。親鸞著作からは、親鸞が、太子慧思禅師後身説、観音化身説等を取っていることが確認できた。次に親鸞の聖徳太子著作と『日本書紀』・『聖徳太子伝暦』・『上宮聖徳法王帝説』との比較を行った。結果として、親鸞の聖徳太子著作の中には、聖徳太子の異名として四天王寺系で採用されている「豊聡耳」と法隆寺系で採用されている「豊聡八耳」の両方を使っている、両系統共通のものを使用している等、著作の内容から、四天王寺系以外の要素

も見られることが確認できた。以上のことから、親鸞の太子信仰は四天王寺系のみならず、法隆寺系等の影響も受けていると見られるため、四天王寺系や法隆寺系等の特定の系譜に縛られるものではなかったと考える。

## おわりに

本論文では、親鸞の太子信仰が四天王寺系譜のものであると言えるのか、太子化身説、四天王寺・法隆寺の対抗関係の確認の後、四天王寺系・法隆寺系の伝記の内容と、親鸞の太子著作とを比較することで行った。

第一章においては、主に親鸞著作に見られる太子慧思禅師後身説、観音化身説等を概観し、聖徳太子の霊場として四天王寺・法隆寺について確認した。四天王寺は、太子信仰とともに、浄土信仰の聖地としても一大拠点となっていたこと、法隆寺については、顕真が権威向上を図っていたことが確認できた。

第二章においては、四天王寺と法隆寺の太子信仰の違いを確認し、先行研究において指摘される、両寺の対抗意識があったと言えるのを確認した。結果として、『聖徳太子伝暦』において、『上宮聖徳法王帝説』の説が否定されている箇所がある、『聖徳太子伝私記』に法隆寺と四天王寺を比べる文が見受けられる等、四天王寺と法隆寺は、互いに意識していた点があることが確認できた。

第三章においては、親鸞の太子信仰について、親鸞の太子信仰が

どのようなものであったかを概観し、太子関連の親鸞著作の内容から、親鸞が、太子慧思禪師後身説、観音化身説等を取っていることが確認できた。次に親鸞の聖徳太子著作と、『日本書紀』・『聖徳太子伝暦』・『上宮聖徳法王帝説』等との比較を行った。結果として、親鸞の聖徳太子著作の中には、聖徳太子の異名として四天王寺系で採用されている「豊聡耳」と法隆寺系で採用されている「豊聡八耳」の両方を使っている、法隆寺系でみられる勝鬘夫人説を採用している等、著作の内容から、四天王寺系以外の伝記の要素がみられることが確認できた。

結果として、親鸞の太子信仰は法隆寺系等の影響も受けており、四天王寺系や法隆寺系等の特定の系譜に縛られるものではなかったことを示した。このことにより、親鸞の太子信仰の研究では、一つの系統だけでなく、様々な系統の太子信仰からの視点が必要であり、太子著作の典拠とされているものについては、四天王寺系の太子伝記以外にも目を向ける必要があると考える。

## 註

- ① 『皇太子聖徳奉讃』七五首は、①『六角堂縁起』に基づくもの、②聖徳太子慧思後身説に基づくもの、③『四天王寺御手印縁起』に基づくもの、④聖徳太子の未来予言に関わるもの、⑤『聖徳太子御廟記文』に基づくもの、⑥『聖徳太子伝暦』およびその引用する「本願縁起」に基づくものなどから構成されていて、『聖徳太子御廟記文』に接して七五首和讃が構想されたのではないかと述べられて

- いる。(吉田一彦「聖徳太子研究の現在と親鸞における太子信仰」九三頁、早島有毅「専修念仏運動における親鸞の太子信仰―『皇太子聖徳奉讃』七十五首を中心の素材として」吉田一彦編『変貌する聖徳太子―日本人は聖徳太子をどのように信仰してきたか』参照)
- ② 吉田一彦「聖徳太子研究の現在と親鸞における太子信仰」九四頁
- ③ 廣田至「親鸞の聖徳太子観」六三頁
- ④ 『聖徳太子伝』上巻、五〇頁
- ⑤ 『宝暦十二年版本 唐大和上東征伝』一九頁
- ⑥ 『伝教大師全集』第一巻、五九一頁
- ⑦ 宮崎健司「太子信仰としての慧思後身説の成立」一二三頁
- ⑧ 『大日本仏教全書』一一二、九頁
- ⑨ 同右、三頁
- ⑩ 同右、一二頁
- ⑪ 同右、二〇頁
- ⑫ 佐原作美「今昔物語集における観音信仰」三八頁参照
- ⑬ 石橋義秀「平安朝仏教説話集にみる観音信仰」七一頁
- ⑭ 同右、六五頁
- ⑮ 駒木敏「靈異記における観音信仰説話」二〇頁、二二頁
- ⑯ 『大日本古記録貞信公記』二〇〇頁
- ⑰ 林幹弥「太子信仰―その発生と発展―」五四頁、五五頁
- ⑱ 先行研究においては、『四天王寺御手印縁起』は聖徳太子の真筆ではなく偽作であるとの指摘がある。(赤松俊秀『鎌倉仏教の研究』三〇六頁)
- ⑲ 『大日本仏教全書』一一八、五一頁
- ⑳ 『日本古典文学全集今昔物語集(二)』一〇九頁
- ㉑ 藤谷厚生「聖徳太子信仰と『太陽の道』―二上山を巡る竹内街道の思想と信仰―」五五頁
- ㉒ 榊原史子「聖徳太子信仰とは何か」五七頁、五八頁
- ㉓ 『大日本仏教全書』一一二、七頁

- 24 『聖德太子伝』上巻、一九四頁  
 25 同右、一九六頁、一九七頁  
 26 同右、二五〇頁  
 27 同右、二五〇頁  
 28 顕真まで書き継いだとされる系図は以下のように記されている。  
 康仁、慶好、頼円、覚印、智勝、隆詮、顕真。  
 各自慶好、朝円、覚印、以下、如元・  
 或頼円之書伝之隆詮、顕真云々。  
 29 吉田一彦「聖德太子信仰の基調―四天王寺と法隆寺」、吉田一彦  
 編『変貌する聖德太子―日本人は聖德太子をどのように信仰してき  
 たか』二六頁  
 30 榊原史子『『天王寺秘決』の成立と『太子伝古今目録抄』への展  
 開―四天王寺と法隆寺の対抗意識』六三頁  
 31 『新編日本古典文学全集三・日本書紀(二)』五一二頁、五一四頁  
 32 同右、五三二頁  
 33 同右、五七八頁  
 34 『新編日本古典文学全集四・日本書紀(三)』一六八頁、一七〇頁  
 35 『新編日本古典文学全集三・日本書紀(二)』五五四頁  
 36 『新編日本古典文学全集四・日本書紀(三)』八二頁  
 37 同右、二八二頁  
 38 同右、二八四頁、二八六頁  
 39 『新編日本古典文学全集三・日本書紀(二)』五一二頁  
 40 同右、五七六頁  
 41 『大日本仏教全書』一一二、四七頁  
 42 同右、四七頁  
 43 同右、三六頁  
 44 『新編日本古典文学全集三・日本書紀(二)』五七八頁  
 45 『大日本仏教全書』一一二、四四頁

- 46 同右、三七頁  
 47 吉田一彦編『変貌する聖德太子―日本人は聖德太子をどのように  
 信仰してきたか』三七頁  
 48 『新編日本古典文学全集三・日本書紀(二)』五三〇頁  
 49 同右、五三二頁  
 50 『大日本仏教全書』一一二、四四頁  
 51 同右、一九頁。辞讓は謙遜して譲るの意で取った。  
 52 同右、四九頁  
 53 榊原史子『『天王寺秘決』の成立と『太子伝古今目録抄』への展  
 開―四天王寺と法隆寺の対抗意識』五五頁  
 54 『聖德太子伝』上巻、一三二頁  
 55 榊原史子『『天王寺秘決』の成立と『太子伝古今目録抄』への展  
 開―四天王寺と法隆寺の対抗意識』五九頁  
 56 吉田一彦「聖德太子研究の現在と親鸞における太子信仰」九四頁。  
 註②を参照  
 57 廣田至「親鸞の聖德太子観」六三頁  
 58 教学伝道研究センター編『浄土真宗聖典全書』(以下『聖典全  
 書』)二、宗祖篇上、五一二頁  
 59 同右、五一五頁  
 60 同右、五一五頁  
 61 梅林久高「親鸞聖人の聖德太子観―聖德太子奉讃・和讃を中心に  
 して」六七頁  
 62 『聖典全書』一、一〇三二頁  
 63 龍口恭子「親鸞の六角堂参籠「参籠」の分析を中心に」一六八頁、  
 一六九頁  
 64 『聖典全書』一、五三八頁  
 65 同右、五三八頁  
 66 同右、五三九頁  
 67 同右、五三九頁

- 68 同右、五二二頁  
 69 同右、五四三頁  
 70 同右、五六一頁  
 71 同右、五四三頁  
 72 『新編日本古典文学全集三・日本書紀(二)』五二二頁  
 73 同右、五七六頁  
 74 『大日本仏教全書』一一二、四七頁  
 75 『聖典全書』二、四六六頁  
 76 『新編日本古典文学全集三・日本書紀(二)』五三〇頁  
 77 同右、五三二頁  
 78 『大日本仏教全書』一二二、一九頁  
 79 同右、四四頁  
 80 『聖典全書』二、五七一頁  
 81 同右、五四九頁  
 82 同右、五三八頁  
 83 『大日本仏教全書』一一八、六四頁  
 84 『聖德太子伝』上巻、一九三頁

# 参考文献

## ・史料

- 教学伝道研究センター編『浄土真宗聖典全書』二、宗祖篇上、本願寺出版社、二〇一一年  
 蔵中進編『宝暦十二年版本 唐大和上東征伝』和泉書院、一九七九年  
 小島憲之他『新編日本古典文学全集三・日本書紀(二)』小学館、一九九六年  
 小島憲之他『新編日本古典文学全集四・日本書紀(三)』小学館、一九九八年  
 東京大学史料編纂所編『大日本古記録 貞信公記』岩波書店、一九五六年

親鸞の太子信仰

比叡山専修院附属叡山学院編『伝教大師全集』第一巻、世界聖典刊行協会、一九六六年

藤原猶雪編『聖德太子伝』上巻、臨川書店、一九四四年  
 仏書刊行会編『大日本仏教全書』一二二、仏書刊行会、一九一二年  
 仏書刊行会編『大日本仏教全書』一一七、仏書刊行会、一九一三年  
 仏書刊行会編『大日本仏教全書』一一八、仏書刊行会、一九九三年  
 馬淵和夫『日本古典文学全集「三五」今昔物語集(二)』小学館、一九九九年

## ・書籍

赤松俊秀『鎌倉仏教の研究』平楽寺書店、一九六六年  
 蒲池勢至編『太子信仰』雄山閣出版、一九九九年  
 榊原史子『聖德太子信仰とは何か』勉誠社、二〇二一年  
 林幹弥『太子信仰―その発生と発展―』評論社、一九七二年  
 速水侑編『観音信仰』雄山閣出版、一九八二年  
 吉田一彦編『変貌する聖德太子―日本人は聖德太子をどのように信仰してきたか』平凡社、二〇一一年

## ・論文

石橋義秀『平安朝仏教説話集にみる観音信仰』『大谷学報』第五三巻、三号、一九七三年  
 梅林久高『親鸞聖人の聖德太子観―聖德太子奉讃・和讃を中心にして』『真宗連合学会研究紀要』二五号、一九八一年  
 久保田収『聖德太子観音化身説の源由』『密教文化』通号三二、一九五六年  
 駒木敏『靈異記における観音信仰説話』『同志社国文学』九号、一九七四年  
 榊原史子『「天王寺秘決」の成立と「太子伝古今目録抄」への展開―四天王寺と法隆寺の対抗意識』『ヒストリア』二二四号、二〇一

一年

佐原作美「今昔物語集における観音信仰」『駒沢国文』八号、一九七〇年

武田賢寿「親鸞の聖徳太子観」『東海仏教』通号三五、一九九〇年

龍口恭子「親鸞の六角堂参籠「参籠」の分析を中心に」『印度学仏教学研究』第四七卷、第二号、一九九九年

鶴見晃「親鸞思想と聖徳太子」『教化研究』一六六号、二〇二〇年内記洗「親鸞における聖徳太子像について」『宗教研究』八六卷、第四号、二〇一三年

速水侑「奈良期の観音信仰について」速水侑編『観音信仰』雄山閣出版、一九八二年

速水侑「平安時代における観音信仰の変質」速水侑編『観音信仰』雄山閣出版、一九八二年

廣田至「聖徳太子和讃における「ヲ」の仮名遣いについて」『東海仏教』六七、二〇二二年

廣田至「親鸞の聖徳太子観」大谷大学、二〇二一年、博士論文

藤谷厚生「聖徳太子信仰と「太陽の道」――上山を巡る竹内街道の思想と信仰――」『四天王寺大学紀要』第六八号、二〇一九年

御手洗隆明「聖徳太子和讃とその背景」『教化研究』一六六号、二〇二〇年

宮崎健司「太子信仰としての慧思後身説の成立」『宗教研究』通号三五九、二〇〇九年

吉田一彦「聖徳太子研究の現在と親鸞における太子信仰」『教化研究』一六六号、二〇二〇年